

## 第6回 2018年10月18日(木)

第6回一流塾では、講師に丹羽宇一郎氏（(公社)日本中国友好協会 会長、元伊藤忠商事(株)会長、元中国大使）と、斉藤惇氏（一流塾特別顧問、(一社)日本野球機構会長 日本プロフェッショナル野球組織コミッショナー、(株)KKR ジャパン KKR Global Institute シニアフェロー、前(株)日本取引所グループ取締役兼代表執行役グループ CEO）を、懇親会の特別ゲストに残間里江子氏（プロデューサー、club willbe 代表）をお迎えしました。また懇親会には、一流塾特別顧問の福川伸次氏（(一財)地球産業文化研究所顧問、東洋大学理事長、元通商産業事務次官）と、顧問の渡邊五郎氏（元三井物産(株) 副社長）にもご出席いただきました。



【講師 丹羽氏】

第1部では、『激変する世界情勢と日本のこれから』と題して丹羽氏が講義を行いました。講義の冒頭、世界中どこを見ても、将来への不安、不信感などが蔓延し、これまでの理念が通用しなくなっていること、企業経営、技術開発においても、新しい方向性を打ち出せなくなっていることを説明されました。また、日本と米・中・露・韓・朝などとの複雑化する関係を細かく論究しながら、外交においても新しい考え方が必要であり、「今更やめられない」という日本の過去の過ちの本質に触れて、もうこの考えは捨てなければならないと話されました。中盤では、中国の経済成長や科学分野での発展などを例に、中国の強さが本物であることを示されました。最後には、こうした状況を踏まえ、日本は、留学生を増やし、リベラルアーツ教育を受けた人材を育成し、技術開発を推進していくことが重要であると強調されました。また、質疑では、経営者として何が何でも勝つという覚悟や身体を使った情報収集についてご紹介いただきました。塾生からは、「世界情勢の分かり易い解説で、他では聞くことのできない各国との関係性や日本の立ち位置を聞くことができた」「真実を知る厳格な意見にホンモノを感じた」「伊藤忠商事時代の覚悟の話に非常に感銘を受けた」といった感想が寄せられました。



【講師 斉藤氏】

第2部では、『経営革新』と題して、斉藤氏が講義を行いました。はじめに、世界と日本の主要な経済指数の動向を示し、日本企業が世界に水をあけられている客観的事実を受け止めよと話されました。また、米SOX法を例に、世界の経営者は強烈な緊張感の中で生きていることも強調されました。そして、日本企業にはDisruptionへの挑戦が必要であるが、NANDフラッシュメモリーなど、日本で発明開発されながら国内では活かされなかった事例を挙げて、経営者の発想がグローバルスタンダードに追いついていないことを指摘し、「破壊から生まれる創造」のための肝について説明されました。また、もう一つの挑戦であるコーポレートガバナンスコードについても解説し、ROEやROAの改善などの成果にも言及されました。最後には、社会構造問題などに触れ、「ジェントロジー」という考え方をご紹介いただくとともに、社会人の再教育や有能な外国人の活用などにも取り組む必要があると述べられました。塾生からは、「破壊活動に飛び込めなかった会社の方がやり過ぎた会社よりも致命傷を負うというお話が印象的だった」「コーポレートガバナンスの重要性、日本企業の緊張感の低さに強い危機感を感じた」「これまでの発想から抜け出し、もう一度自分の組織及び人生を考えていきたい」といった声が上がりました。

懇親会では、一柳塾長による開会の挨拶と、福川氏による乾杯の後、特別ゲストの残間氏から『新しい自分創造のために』と題して卓話を頂きました。残間氏は、自分創造について、常に「これで良いのか？」を問い続け、徹底的に自分と向き合って昨日までの自分を捨てて、あるいは閉じて、脱皮するという考え方を紹介されました。そして、これからは、時代の波を見定めながら的確に情報を収集し、分析して、価値ある情報として発信する、情報生産者になって欲しいと話されました。プロデューサーとしてのご経験とユーモアを交えたお話に塾生は引き込まれていました。

卓話後には、当日誕生日を迎えられた斉藤氏に、一柳塾長から花束が贈られるサプライズもあり、会場は和やかな雰囲気にも包まれ、そのまま各テーブルでは講師陣と塾生との活発な意見交換が続きました。

懇親会後の塾生有志による塾長を囲む放談会では、袴を脱いだ交流で深夜まで大いに盛り上がりました。



特別ゲスト 残間氏



懇親会風景



放談会風景

